

教育委員会会議録

令和4年(2022年)2月定例教育委員会会議

令和4年(2022年)2月24日(木)					
開 会 日	令和4年(2022年)2月24日(木)				
開 会 時 間	午後2時00分 ~ 4時00分				
開 会 場 所	教育センター 4階 大研修室				
出 席 者	<table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 5%; text-align: center; vertical-align: middle;">委員 会</td> <td>遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center; vertical-align: middle;">事 務 局</td> <td>松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他</td> </tr> </table>	委員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員	事 務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他
	委員 会	遠藤洋路 教育長 泉薫子 委員 出川聖尚子 委員 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苫野一徳 委員			
事 務 局	松島孝司 教育次長 森江一史 教育次長兼学校教育部長 中村順浩 教育総務部長 他				
提 出 議 案	<p>議第11号 教育長の営利企業等の従事について</p> <p>議第12号 熊本市立小中学校の通学区域等に関する規則の一部改正について</p> <p>議第13号 熊本市立小中学校の管理運営に関する規則の一部改正について</p>				
協 議	(1) 熊本市立幼稚園まなび創造プログラム(素案)について				
報 告	<p>(1) 小中一貫教育の成果と課題について</p> <p>(2) 令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果について</p> <p>(3) 適応指導教室及び各教室の名称変更について</p>				
署 名	泉 薫 子				
	苫 野 一 徳				
会議録作成者	教育政策課 木村三恵				

<p>〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長</p> <p>〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>令和4年2月定例教育委員会会議を開会いたします。</p> <p>本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。</p> <p>会議録署名人は、泉委員と苫野委員とします。</p>
<p>日程第1 前回会議録等承認</p>	
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>1月27日開催の令和4年1月定例教育委員会会議録、2月14日開催の令和4年第1回会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありますか。</p> <p>(異議なしの声)</p> <p>異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。</p>
<p>日程第2 事務局報告の件</p>	
<p>(1) 事業・行事等報告について</p>	
<p>○ 前回定例会議（R4. 1. 27）以降の事業・行事報告</p> <p>○ 今後の予定</p>	
<p>西山忠男 委員</p>	<p>平成さくらとあおば支援学校の卒業生の数と進路について、差し支えない範囲で教えていただけますか。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>平成さくら支援学校とあおば支援学校の卒業生の数と進路についてというご質問だったというふうに思います。</p> <p>卒業生の数は、今、平成さくら支援学校は定数が24名ですが正確な数字は、今は持っておりませんが、進路につきましては、いろんな事業所等一般就労も含めて、まだ全員ではないですが、就職というかたちで学校と一緒に進路先を確定しているところです。</p> <p>あと、あおば支援学校につきましては、小学部の子どもさんは中学部に進学をいたしまして、中学部の子どもさんは、1名だったのですが、今日がそうなんですけど、県立の高等部の受験を今されているということになります。</p> <p>以上です。</p>

西山忠男 委員

分かりました。ありがとうございました。

遠藤洋路 教育長

他にご発言ありますか。ありませんか。
では、他にご発言がなければ、本件は以上といたします。

日程第3 議事

・議第11号 教育長の営利企業等の従事について

遠藤洋路 教育長

議第11号 教育長の営利企業等の従事については、私の一身上に関する案件です。地方教育行政の組織及び運営に関する法律第14条第6項の規定により、当事者は、議事に参与することができないこととされていますので、議事の進行を第一職務代理者である泉委員にお願いしたいと思っております。

泉薫子 委員

それでは、私が議事の進行を務めさせていただきます。
教育長から、当事者は議事に参与することができないとのご説明がありましたので、教育長の退室をお願いします。

（教育長退室）

《中元正人 教育政策課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

客員教授はオンラインの指導ですか、それとも現地での指導
なんですか。

中元正人 教育政策課長

オンラインでございます。

泉薫子 教育長職務代理者

よろしいですか。
他にございませんでしょうか。

小屋松徹彦 委員

同じく客員教授の内容のところ、「大学院生（現職の教育長
や校長が中心）」とありますけど、これは大学院生に関わるん
ですか、この括弧書きは。

ちょっと理解が難しかったでしょうか。大学院生が現職の教
育長とか校長なんですかという聞き方をしているんです。

中元正人 教育政策課長	ちょっと確認してお答えします。大学院生の中に現職の教育長、校長が中心ということになるということで理解しております。違っておりましたら改めてご説明いたします。
小屋松徹彦 委員	大学の大学院と、私がそちらをイメージしたものだからということでもありますので。
西山忠男 委員	現職の教育長が大学院生っておかしくないですか。それはあり得ない。校長も大学院生ということはありませんけど、現職であれば。 これは「他の教員」の後に括弧の場所が来るんじゃないんですかね。でないと非常に奇妙な感じがします。
小屋松徹彦 委員	いいですよ。直接採決に影響はしないと思います。
泉薫子 教育長職務代理者	それでは、調べていただいて、後からご報告していただくということでよろしいでしょうか。 他にご質問はございませんか。 採決に問題はございませんか。大丈夫ですか。 では、ご発言がないようですので採決を行います。 議第11号 教育長の営利企業等の従事についてご承認いただくことにご異議ございませんでしょうか。 (異議なしの声)
泉薫子 教育長職務代理者	異議なしと認めます。 議第11号については許可することと決定いたします。 それでは、教育長の入室をお願いいたします。
[採決] 【原案どおり承認された】	
松島孝司 教育次長	委員、すみません。1点、補足で。 承認いただいたんですが、ホームページを今検索しましたら、全国で唯一のコースとして、やはり現職の教育長や将来の教育長候補及び教育行政の幹部養成コースということで開講されています。教育長等が学べる、唯一のコースみたいです。 すみません、補足でございました。

西山忠男 委員	それはでも、あり得るんですか。
松島孝司 教育次長	あり得るみたいです。
森江一史 教育次長兼学校教育部長	オンラインとかいうところを書いてありますので。対面というか。
西山忠男 委員	いや、私が気にしてるのは、教育長が大学院生になることが許されるのかということなんですけど。
松島孝司 教育次長	地元で学べる新しい授業スタイルとか、全国で唯一の初めての取組ということで、紹介してあります。
西山忠男 委員	そうですか。
森江一史 教育次長兼学校教育部長	夜間と土日開校ということで、書いてあります。
西山忠男 委員	なるほど。
泉薫子 教育長職務代理者	よろしいでしょうか。 では、教育長の入室をお願いいたします。
(教育長入室)	
遠藤洋路 教育長	何か説明することがあれば。
泉薫子 教育長職務代理者	「大学院生(現職の教育長や校長)」というところが非常に珍しい内容でしたので、皆さん、それに興味を持たれました。
遠藤洋路 教育長	もし発言してよければ。
泉薫子 教育長職務代理者	説明していただけますか。 お願いいたします。
遠藤洋路 教育長	大学院生というのは、兵庫教育大学の教育行政のリーダー養成という講座で、ですから現職の教育長、それから教育長候補者、それから学校管理職が対象のコースです。ですので、大学

院生は教育長とか学校長とか、そういう人が中心です。

他の政令市の教育長さんとか、九州の他の自治体の教育長さんも同じように客員教授として指導に当たるとい、そういうことになっているというふうに聞いております。

- ・議第12号 熊本市立小中学校の通学区域等に関する規則の一部改正について

《上村奈津子 指導課副課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

- ・議第13号 熊本市立小中学校の管理運営に関する規則の一部改正について

《石加浩二 指導課長 提出理由説明》

[採決] 【原案どおり承認された】

日程第4 協議

- ・協議（1）熊本市立幼稚園まなび創造プログラム（素案）について

《松永直樹 学校改革推進課長 提出理由説明》

西山忠男 委員

3の幼小連携カリキュラムの充実と活用促進というのがございますけど、幼小連携というのは具体的にどこの小学校と連携するかというのはもう考えてあるんですか。

松永直樹 学校改革推進課長

市立幼稚園における幼小連携という部分では、例えば川尻幼稚園には近隣の小学校がございますし、向山幼稚園にもございますから、そういった小学校との交流が中心になってくるかと思っております。

ただ、ここで申します幼小連携の幼につきましては、保育園、私立を含めた幼児教育施設と市立の小学校との連携ということ想定しております、その中でどういった取組ができるかと

	<p>いうのを、幼小連携カリキュラムをつくる中で当時進めておりましたが、さらなる充実が必要といった検討委員会でのご意見もございましたことから、今あるカリキュラムをさらにブラッシュアップいたしましたうえで取組を拡充したいと考えています。</p>
西山忠男 委員	<p>まだちょっとイメージが湧かないので申し訳ないんですけど、特定の小学校と特定の幼稚園の間で連携カリキュラムをつくるというのはやりやすいと思うんですけど、そうでない場合はかなり難しいんじゃないかなという気がいたしまして、その辺はどういうふうにするのかなと。</p> <p>要するに、ある小学校に入ってくる生徒さんがその幼稚園からばかり来るわけではないわけですから、連携といっても限定的で、他の生徒さんに対してはどうなるのかなという感じがするんですよ。そのあたりはどうなっているんでしょうか。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>例えば特別な支援を要するお子様への対応としましては、移行支援シート、就学支援シートの活用等ございますが、そういったものを使って今も情報共有を図っているところでございます。</p> <p>ただ、ここの部分につきましては、市立幼稚園におきましては取組が進んでおりますものの、市全体を考えたときにまだ活用状況が十分でないといった部分がございますので、その充実を図るということは必要かと思っております。</p> <p>また、各校区におきましては「幼小中連携の日」というのを設けて、日々の実践の中で常日頃からの繋がりはあるところでございます。その取組につきましては、これまでの積み重ねも当然ございますので、その部分ではさらに磨き上げていくようなことになろうかとは思っております。</p> <p>また、例えば転園をしたとか、様々他の部分での連携も必要となると思いますし、幼小中と申しあげましたが、高校生もぜひ幼稚園に出向いていろいろ交流を図りたいというような要望も出ておりますし、幼稚園側からも同様のご意見もいただいておりますので、そういった意味でいいますと、広く異校種間の交流というのを想定しつつ取組を進める、イメージとしてはそういったことを考えているところでございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>本体の方の34ページ以降に「幼小連携の推進」という文句</p>

	<p>がありますよね。この中に、例えば34ページでいえば、幼小連携カリキュラム、「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」の改訂と活用促進及び普及啓発ということで、これ新しくつくるわけではなくて、既にあるわけなんです。</p> <p>その次のページには「幼小連携支援員の配置」ということで、これは新しく人を配置しますよということなんだと思うんですけど、今既にやっていることもあるわけで、このアプローチカリキュラムとかスタートカリキュラム、その辺の説明をしてもらえるとイメージが私は湧きやすいのかなと思うんですけど。</p> <p>幼小接続カリキュラムというのがございまして、連携カリキュラムなんですけど、アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムと2つございまして、アプローチカリキュラムといいますと、幼稚園側から、小学校に上がるときにこんなことをしていきたいと思いますというようなもので、就学までには身に付けさせたい力ですとか姿ですとか、そういったものをカリキュラムとして、こんなことをしたらどうでしょうかということで、5歳児には例えば10月にはこういうことをというような例示としてつくっているものです。</p> <p>あと、スタートカリキュラムは、小学校に入ってきてすぐに、小学校、同じようなことをしてもなかなか戸惑うということで、最初に、例えば1日目は入学式とかがありますが、2日目にうきうきタイムというのを設けて、鉛筆の持ち方ですとか、みんな、歌で仲良しになりましょうとか、そういったものをずっと1か月、2か月というように、1か月ぐらいですか、つくって、まず学校に慣れさせていきたいと思いますというのを1つの代表的なプログラムとしてつくってあるものです。あとは学校の実態によってそれを変えていくと。</p> <p>それを、幼稚園の指導要領が改訂されましたので、これも見据えてもう1回改訂をしようというようなところで考えているところでございます。</p>
石加浩二 指導課長	<p>ありがとうございます。</p> <p>あともう1点、幼小連携支援員、これはどうですか。新しくこういう人を置くわけですけど、どんなことをするのかというのは。</p>
遠藤洋路 教育長	幼小連携支援員につきましては、今回の資料30ページに記

課長

載をしておりますが、市立幼稚園におきましては幼稚園、小学校の設置者が同じというような強みを生かしまして、本市全体における幼小連携の取組を先導するようなことをイメージしております。

具体的には、小学校勤務経験のある退職教員を幼小連携支援員として市立幼稚園各園に配置をいたしまして、幼児期と小学校の教育内容の違いや、小学校の学びにおいて相互理解を深めるための助言、支援を行いたいと考えております。

これは日々悩んでいらっしゃる保護者へのご対応という部分でも非常に有意かと思いますが、幼稚園教育の充実、担任の先生のバックアップにも十分繋がるものだというふうに思っております。

こういった連携につきましては、今回初めて組み上げていくというようなところがございますので、実際の運用につきましては今後決めていきますが、小学校現場でのご経験というのを市立幼稚園にも広く生かせるということはお意見としてもいただいておりますし、幼稚園現場の担任の先生からも非常にここはご評価いただいている計画でございますので、この連携についてはしっかりと進めていきたいと思っております。

遠藤洋路 教育長

森江次長、小学校の先生が退職して幼稚園に行ったらどんなことができるんですか。

森江一史 教育次長兼
学校教育部長

これまでも幼小連携については、熊本市は先進的に取り組んでいる部分もございます。石加課長が説明しましたこのカリキュラムについても、公立だけではなくて、私立幼稚園についても、保育園についてもこの提案を事前からしているのですが、なかなかそれが広がってこない、そういう中で、小学校にはいろんな幼稚園、保育園から上がってきますので、そこを今回、市立幼稚園にこの幼小連携支援員を配置することで、少しリーダーシップを取って推進できないかなというふうに考えております。

具体的には、小学校の教員の経験者を、退職教員ですけど、各園に配置して、各園で行われている保育について、それぞれの保育が小学校の教育にどう繋がっていくのかという視点からアドバイスができるのではないかなというふうに考えております。

それは園内の研修の講師となる場合もあるでしょうし、日々

苦野一徳 委員

の保育の中で担任の保育研究と一緒に関わっていくということも考えられます。

小学校の教員は幼稚園のことを知らないという現実がございますので、逆に幼稚園の教諭は小学校の教育を知らないという面もございますので、今回は幼稚園の担任と元小学校の担任と一緒に幼稚園の保育を見直していくということが考えられると思います。

熊本市の幼小連携等、よく存じ上げないのでまだあんまり言えないところがあるので、教育委員の立場としてこのようなお話をするのが相応しいのかも分からないので、今後の議論の1つの参照枠としてお話をさせていただければと思うんですが、私もかなりたくさんの幼保小連携の現場を見たり、スタートカリキュラムを見たり、先生方と話をしたり、幼稚園の先生方、保育園の先生方とご一緒したりすることがあるんですけど、現状は圧倒的に幼稚園が小学校に合わせていくというのが多いなという実感を持っております。

むしろ幼稚園、保育園の子どもたちとの接し方とか、遊び主体から学び主体へというのが幼児教育の基本で。ところが小学校以降になるとどうしても遊びと学びというのが切り分けられてしまいがちで、遊びは楽しいもので学びは面白くないものみたいなことを植え付けられてしまう。幼稚園の場合はそうではなくて、遊びのところに探究していくことの土台があるという発想を、先生方はほとんどお持ちだと思うんですね。

これって教育の基本だと思いますので、この知恵をむしろ小学校に還流させていくという流れを起こしたい。幼稚園の先生方は、みんな思っているんですね。せっかくこうやって自由に伸び伸び活発に成長した子どもたちが、小学校でだんだんと委縮していくのを見て辛い思いをするというのもたくさん聞くんですよ。熊本市がそうというわけではもちろんないんですけど、そういった例をいっぱい見るに当たって、幼小連携に際して、小学校側からのアプローチというより、むしろ幼稚園の先生方の知恵とか思いとかを小学校に還流させていくような仕組みが私はもっと充実される方がいいんじゃないかなと。

例えば異年齢で学び合っている、学び合っているというか活動している子どもたちが、年長さんになるとものすごくお兄さん、お姉さんになってたくましくなっているというのも、小学校に入ると突然、それこそ鉛筆の持ち方とか箸の上げ下げに至

<p>森江一史 教育次長兼 学校教育部長</p>	<p>るまで指導されて、今までの活発さを失っていくみたいなこともたくさん目にしてきたんですけど。こういったことを私たち大事にしているんですという幼稚園の先生方の思いを小学校にどんどん伝えていく、これが本当にはないのですよね。全国で、こっちの裏の流れが。なので、こういうこっちの還流の仕組みを、何とか熊本市で充実させられないかなというのを一応一委員として申し上げさせていただければと思う次第です。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>その取組の一つとして、熊本市では小学校の授業研究会というものがございます。この授業研究会の中に、熊本市には公立幼稚園が、研究モデル校として6園がそれぞれ研究に取り組んでおります。</p> <p>今回、この幼稚園の取組と小学校の授業研究会を同じ日に設定しまして、幼稚園の取組も小学校の先生方に入っただく、小学校の授業研究会も幼稚園の先生方が参加していただけるような仕組みを教育センターで作りまして、本年度かなりの数が、例年よりも多くの小学校の先生方が幼稚園の取組に、発表に参加していただいているというふうに聞いております。</p> <p>そのように、なかなかこれまで小学校の教諭が幼稚園の取組に学ぶ機会が少なかったということがございますので、今回の幼稚園への幼小連携支援員の配置が1つのきっかけになって、さらに小学校の教諭が幼稚園に出かけて幼児教育の場から学ぶ機会を増やしていくという方向をこれからも考えていきたいと思っております。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>このプログラムの中には、小学校が幼稚園から学ぶという、そういう要素というのはどこかに入っているのでしょうか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進 課長</p>	<p>今ご指摘の点につきましては、本体の26ページの「職員研修の充実」の中に書き込んでおります。</p> <p>あと、具体的な小学校の取組を書いてはいないんですが、21ページの「遊びを通しての総合的な指導の充実」、この中身を検討する中で、先ほどおっしゃられたような意見というのも出ておまして、ここで整理をしているようなかたちでございます。</p>
<p>苫野一徳 委員</p>	<p>ありがとうございます。</p>

	<p>そこに認識がいとていい仕組になっていくんじゃないかなと思います。</p> <p>私としては、幼小の先生方が交ざり合っというか、どんな教育をしていきたいんだろう、何を大事にしたいんだろうというのをしっかりと対話をして、どうしても、小学校に入るからそれまでにこれぐらいのことできるようにしておこうみたいな、小学校に引張られるんですよね、こういう場って。</p> <p>そうじゃなくて、それぞれの発達過程において何ができるんだろうということと一緒にまず対話をして、今、ある種のコンセンサスというか、どういう関係築いていくという、そういう対話の場を何よりも大事にすることが必要かなというのを私自身の経験から思っておりますので、そういう場があればいいなと思って発言させていただきました。ありがとうございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>その点は保護者の理解ということも多分大事な要素なので。幼稚園に合わせている小学校に行きたいか、小学校に合わせている幼稚園に行きたいかと言われたら、保護者は多分小学校の準備ができる幼稚園に行きたいということを希望される方も多いと。なぜ小学校で幼稚園に合わせた、幼稚園の良いところを取り入れたこういった学習対応をしていくべきなのかというのは、これは教育委員会もそうなんですけど、ぜひ苦野先生が専門家として発信して普及していただければありがたいなというふうに思っています。</p>
西山忠男 委員	<p>話を伺っていると、最初、松永さんがおっしゃった移行シートの活用なんていうのは個別の連携ですよね。</p> <p>ここで考えられているのはもっと大きな全体的な連携の話ですよね。多分2種類、連携はあるんだと思うんですけど。</p> <p>個別はいいとして、全体的な連携の場合にどういう連携カリキュラムがあり得るのかということについて、まだ具体的なイメージが湧かないという質問の意図だったんですよ。だからどういう連携カリキュラムをつくったらより効果的な教育ができるのか、特にどういう点に関して効果が上がるのかということがまだ見えないというのが私の疑問だったわけです。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>いかがですか。その疑問は、少しは解消されましたか。</p>
西山忠男 委員	<p>いや、やっぱり現場を見てみないと分からないですね。</p>

遠藤洋路 教育長

プログラムの実施を通してという。教育委員会はそれをフォローしていくということで進めて行きたいと思います。

森江一史 教育次長兼
学校教育部長

具体的な取組として、先ほど松永課長が申しましたが、26ページにありますように、実際に生活科等の小学校教科等研究会と市立幼稚園の研究会、市幼研と申しますが、この連携が非常に今進んでおります。幼稚園は幼稚園の先生だけで研究をしていた、小学校は小学校の分だけで確かに幼小連携というのを研究していたんですけど、これは笑い話になりますけど、このアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムみたいな発想がなかった時代は、年長の子どもたちは小学校に入学する半年ぐらい前からもうお昼寝をしない、なぜかという小学校に入ったからお昼寝なくなると。それから、小学校に入ったら45分、もう今日からは小学生なんです、45分きちんと座りましょうということで、年長組で45分間椅子に座らせる練習をしていますみたいなお話を真剣に聞いていました。小学校は小学校でそれが当たり前みたいに当時は思っていたと思うんですけど、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムの発想が出てきたときに、やはり相互に情報交換が必要だということをお互いを感じまして、こういう研究会同士の連携が続いているということも効果を上げているんですけど、少しずつ小学校教員も意識を変えることに繋がっていると思いますが、まだまだですので、これを機会にさらに推進していきたいと思います。

遠藤洋路 教育長

遊びを通じて学ぶというスタイルというのは、小学校以上でも、活動を通して学ぶということは、今、当然そういう方向になってきてはいるわけです。やはり小学校になると、今、森江次長がまさに言ったように椅子に座って授業を聞くという、あるいは活動をするにしても規律正しく、学習規律を守る活動をするというのは、そういうところがメインになってくるようなところはあるんでしょうね。

確かにその時間によっても違うんだと思うんですよね。例えば、低学年は生活科、そういうところの連携というか、そういう具体的なところから。小学校活動全般というとまた広がってしまうので、幼稚園と接続しやすい部分から重点的に取り組んでいく、そういう方法もあるというふうに思います。あるいは特別活動とか学校行事も含めて、いわゆる座学的なものじゃ

	<p>ない教科活動から、やりやすいところから取り入れるというふうな、そういったところも考えていけばいいのかなというふうに思います。</p> <p>他にいかがですか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>1点質問で、幼児教育センターというのは熊本市にはあるんでしょうか。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>幼児教育センターは、どんな内容ですか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>幼小連携を進めたり、熊本県教育委員会の中にあります。</p>
松永直樹 学校改革推進課長	<p>他都市におきましてはそういったセンター機能を持ったものが自治体によってはありますが、本市においてはございません。そのような機能につきましては、様々アプローチはあろうかと思いますが、プログラムの中では教育・福祉連携コーディネーターあたりを新たに置くこととしておりますし、そういったところで福祉、教育の垣根なくどういった取組ができるのかというのは課題でございますので、検討を進める中であり方を整理したいと思っております。</p> <p>さらに、具体的な施策では、(2)の⑦に児童発達支援事業所等との連携というものもございます。これは検討委員会でご提言いただいたものです、例えば幼稚園に通いながら児童発達事業所に通う、そういった並行通園のあり方、これはキーワードとして並行通園といったものが出ておりますけど、そういったものの研究をしてほしいというご提言ございましたが、具体的なイメージがまだ描けておりません。</p> <p>こういった部分につきまして、言わば本市教育委員会事務局がセンター機能を持つようなかたちで取組を進めるというのは1つ課題としてございますので、またかたちができたらご報告をさせていただきたいと思っております。</p>
出川聖尚子 委員	<p>今のご提案いただいているプログラムの中には、市全体の幼小、幼稚園、幼児教育施設等に関する事柄を率先し、リーダー的な役割としてやるというイメージがあったので、幼児教育センターというものでなくても、そういう役割をここが果たしているのかなと思ったので、お聞きしました。</p> <p>あと1点、こちらに書かれています幼小連携の推進ですが、</p>

松永直樹 学校改革推進
課長

幼児教育の施設へのリーダー的な役割を果たすと考えるならば、市全体の幼小、幼保小、あるいは他の就学前の子どもたちの小学校との連携に力を尽くしていくことが書かれると、市立の幼稚園だけがすごく充実している印象を受けず、市全体の幼児教育についてここは取り組んでいると思われるのではないかと思います。

委員ご指摘の点につきましては、市立幼稚園の存在意義を考えるうえで非常に重要な点だというふうに思っております。いわゆるセンター機能を果たしていく中で、当然、市立幼稚園だけが良くなるということは、市全体を考えた場合には望まれていないというふうに思っております。ですので、市立幼稚園に求められる役割につきましても、本市幼児教育、全体の質の向上に寄与することを役割として記載をしております。

また、今ご指摘の点につきましては、各施策、各取組項目についてもそれぞれ書き込みをしております。庁内で様々議論を進めていく中でもそういったご指摘もあったことから、そこは意を用いて記載をしたところでございます。

さらには、今先ほどもご紹介ありましたが、本市には小規模保育所等、様々な保育の形態がございますので、標準指導計画を策定するに当たりましては、そういった、いわゆる市立幼稚園とはちょっと違うような保育を行っているような事業所にも参考になるようなものをつくれなにかということは議論の中で考えております。

また、先ほどのスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムをつくる際には、私立幼稚園の現場の先生にも実際ご意見をいただきながら進めました。今回このプログラムをつくる中で、いろいろお聞きしたんですが、私立幼稚園の方からは大変ありがたかったと。1つは私立の意見が取り入れられたということ。もうひとつは、先生方がそういった策定業務に入ったことで、先生方の学びといいますか成長に繋がったということで、今後もぜひ一緒に取組を進めていきたいというようなお声もいただいているところですので、今後は、その標準指導計画策定をはじめとした各種プログラムを進めるに当たりましては、しっかりと私立の先生方のご意見も伺いながら一緒に共有をしながらつくっていききたいというふうに考えているところでございます。

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>今、大変大事なご意見をいただいたところであります。確かに教育委員会の体制ということも1つ大事な要素としてはあるんだと思います。プログラムの中にはそれは今のところは書いていないのかなど。</p> <p>今、出川委員ご指摘はそのとおりで、市立幼稚園の大きな課題は、どこが所管しているのかよく分からないということがあって、もちろん教育委員会が所管しているんですけど、教育政策課だったり学校改革推進課だったり指導課だったり、いろんな観点でいろんなところが仕事をしているんです。ここが市立幼稚園の担当ですというのが1つあるわけじゃないんですよね。教育センターも幼児教育をやっているんじゃないですか。</p>
<p>廣瀬泰幸 教育センター 所長</p>	<p>先ほどもお話に出ていましたが、生活科との繋がり、そういった低学年との繋がりがありますので、そういった点で教育センターでは幼稚園との連携に取り組んでいるところです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>幼稚園の担当というのはいないですか。</p>
<p>廣瀬泰幸 教育センター 所長</p>	<p>幼稚園の担当はおりませんが、総合的な学習の時間、生活科の担当が、今はそこのところの対応をしております。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>分かりました。</p> <p>何か幼稚園を専ら担当する部署がないというか。なぜそうなっているかという、市長部局に保育幼稚園課という課があつてそこが幼児教育全体をやっていて、教育委員会はあくまでも熊本市立幼稚園を管理運営しているという、そういう役割に一応なっているので、幼児教育全体とか保育も含めた市全体の政策を考えるとというのは、本来は保育幼稚園課というところの仕事でもあるんですけど。そこと教育委員会との連携というんでしょうか、この部分がまだ十分でないのかもしれない。それから、教育委員会の中でそれを主に推進する担当というのがあまりはっきりしていないということで。</p> <p>今せつかくご指摘をいただいたので、教育委員会側の体制づくりというものも大きな課題としてどこか少し書いたほうがいいのかもしれないですね。プログラムに。ちょっと検討します。</p>
<p>森江一史 教育次長兼 学校教育部長</p>	<p>資料の25ページに「保育力向上支援員（ステップアップサポーター）の派遣」というものを書いております。現在、幼稚園</p>

	<p>の担当が指導課におります。幼稚園長を経験した2人の再任用職員がおりますので、この2人が指導課で勤務をしておりますので幼稚園の保育力向上支援員という担当をしておるところです。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>そういう指導力向上はその人たちという、それぞればらばらに分担しているみたいな話です。センターというか、それも1つ融合していけたらいいなど。課題として検討させていただきたいと思います。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>資料の30ページに「教育・福祉連携コーディネーターの派遣」というのがございますが、これは、脚注によりますと、教育委員会事務局に配置し派遣するという理解になるのでしょうか。その場合、幼稚園に配置するのでしょうか。それから、既に配置済みの発達支援コーディネーターとの関係はどうなるのか、お尋ねいたします。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>教育・福祉連携コーディネーターにつきましては、派遣ということで事務局に在籍をして各園にお伺いをするというようなかたちです。</p> <p>言葉の整理としましては、派遣と書いたものにつきましては事務局、配置と書いたものについては幼稚園各園に行っていたくようなことで言葉の使い分けをしております。</p> <p>また、役割分担でございますが、幼稚園内部に発達支援コーディネーターがいらっしゃる、教育・福祉連携コーディネーターは外部というか、教育委員会事務局ということになりますので、その仕分けといいますか、役割分担というのはあるのかというふうに考えています。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>まだ仕組がよく理解できていないんですけど。発達支援コーディネーターは発達支援センターがやっている取組ですよ。それでこちらは、教育・福祉連携コーディネーターを派遣すると。</p> <p>どうも何か二重に同じことをやることになるんじゃないかという気がして、その辺はどうなるのかよく分からないんですけど。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進</p>	<p>すみません。教育・福祉連携コーディネーターは新規の取組</p>

<p>課長</p>	<p>でございますので、その役割分担というのはこれから整理する部分でございますが、発達支援コーディネーターそのものは子ども発達支援センターが推進している取組でございます。福祉分野からのアプローチということでございます。市立幼稚園におきましても、必要な研修等を行っておられる先生方が通常業務の1つとして担っていただいておりますけれども、その役割分担についてはこれから整理をしてみたいというふうに思っております。</p> <p>先ほども申しましたように、教育・福祉連携コーディネーターは事務局に置いて外からアプローチをしていく、発達支援コーディネーターは子ども発達支援センターの事業のひとつではありますけれども、その事業を踏まえた取組というのは市立幼稚園内部で進めていただいておりますので、ある程度の役割分担というのは今後検討を進めていく中で出てくるのかなというふうに考えております。</p>
<p>西山忠男 委員</p>	<p>教育・福祉連携コーディネーターというのは幼稚園だけに配置すればいいというものでもないような気がするんですね。さっきの幼小連携の観点からすると、やはり小学校低学年の中でそういうコーディネーターを必要とする生徒さんがいるかもしれないので、それをどれぐらいの規模でやるのかというのはやっぱり考えなきゃいけないんじゃないかなという気がするんですけど、いかがでしょうか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>新規でこの教育・福祉連携コーディネーターというものを検討した際に、これは幼稚園に限ったところではございませんでした。議論の中でも特に幼稚園に限ってということでもございませんでしたので、そこは広く検討ができるかというふうに思っております。</p> <p>同様のものとしたしましては、職員体制の充実の22ページに外国語支援員の派遣というものを1つ検討事項として挙げております。日本語を母語としない保護者の方、お子様が増えているといった現状がございます。これは市立幼稚園にもそういった状況がございますが、市立高校等にも同じような状況がございますので、そこをカバーするというだけでは市立幼稚園に限った話ではないというふうに思っておりますが、本市全体としてどういう整理ができるかというのは、これから検討を進めてまいりたいと思います。</p>

<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>確認ですが、この教育・福祉連携コーディネーターというのは幼稚園に限ったものではないということは、小学校以上の教育と福祉の連携もやりますということなんでしょうか。</p>
<p>松永直樹 学校改革推進課長</p>	<p>まだ具体的なイメージが描けていない部分がございますが、教育・福祉連携コーディネーターについては市立幼稚園内にとどまらず広くということを考えております。ですので、例えばここでは退職教員の想定をしておりますが、その方というのは別に市立幼稚園の退職教員ということではなく、広く特別支援教育に携わってこられた方を想定しておりますので、そういった意味では幼小中当たりを含めた取組でもあり得るのかなと考えているところでございます。</p>
<p>若杉敏郎 特別支援教育室長</p>	<p>教育・福祉連携コーディネーターに関する業務でも小学校での業務ということで、直接ではないかもしれませんが、今現在の状況としましては、小学校の中にも保育所等訪問支援事業というのが福祉サイドの事業として始まっております。それで、特別支援教育のお子さんだけではないですけど、そういうふうに福祉側に保護者さんのニーズがある場合には保育所や学校も含めて支援をしていくという体制がありまして、そこにつきましては我々のほうが窓口になりながら、障がい保健福祉課の事業ですけど、そこと連携をして学校でそのニーズがしっかり受け止められるような体制をつくるという意味で、連携をしながら、校長会とも含めて啓発をしながら事業として行っているところです。コーディネーターがいるということではないですけど、今現在もそういうコーディネーター的な内容につきましては教育委員会も含めて協力させていただいて、他課の連携ができるように取り組ませていただいているところはあります。</p> <p>以上です。</p>
<p>遠藤洋路 教育長</p>	<p>小学校以上で教育と福祉の連携をコーディネートする人というのは、今スクールソーシャルワーカーという人がいると思うんですけど、そこの役割分担というのはどうなんですか。</p>
<p>川上敬士 総合支援課長</p>	<p>現在のところはスクールソーシャルワーカーが幼稚園に関わっているケースがありません。この中にも入っておりますけど、スクールソーシャルワーカーもそういった福祉との連携の部分</p>

	<p>で幼稚園のほうに派遣し、保護者の方にも対応できるような体制を今考えております。これから少しずつ幼稚園から小学校への福祉的な問題をつないでいくなど、そういう課題には取り組んでいけるのかなというふうには考えています。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>今言ったことは小学校以上の話で、教育・福祉連携コーディネーターという人が幼稚園だけでなく小学校以上にも同じような仕事をするのであれば、今いるスクールソーシャルワーカーとの役割分担が、小学校以上でどうなるのかなというふうに思ったんです。</p>
川上敬士 総合支援課長	<p>教育・福祉連携コーディネーターというものが、私が十分どういう役割を持っているかが認識できておりませんので、今後検討させていただきたいと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。これからつくるからこれから考えるという、そういうことですかね。たくさんいるに越したことはない、今日のところはそのぐらいにしておいて、実際にできてから段々と充実していくようになるかもしれません。</p>
出川聖尚子 委員	<p>教育・福祉連携コーディネーターは、恐らくですが、発達に心配があるお子さんの教育と福祉を、ここは特に発達においてご心配なお子さんがいらっしゃるところの相談を受けて、そしていろいろなところに結びつけるという役割ではないかと思えますし、保育園なども、派遣していただいてお子さんの様子を見てもらうということはされてらっしゃると思います。</p>
西山忠男 委員	<p>私もそう思ったので、一番最初に発達支援コーディネーターとの役割分担はどうなるんですかとお尋ねしたんですよね。まだ計画中の段階なので、こんなことを根掘り葉掘り聞いても仕方がないと思うんですけど、そのあたりはしっかり考えてプランニングしていただければと思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>教育・福祉連携コーディネーターというのは、出川委員、他の自治体でも結構な事例はあるんですか。</p>
出川聖尚子 委員	<p>存じ上げません。申し訳ありません。</p>

遠藤洋路 教育長	<p>役割、幼稚園だけでなく小学校以上もということであれば、確かにこれから、まだ詰まっていないところがたくさんあるのでやっていきたいと思いますが、おっしゃったように特別支援という文脈で書いてある、それが原因なのかもしれませんね。</p>
出川聖尚子 委員	<p>例えば発達にご心配のあるお子さんとかだと福祉とは連携が取りやすいような状況にあっても、教育と連携、学校との連携が難しいという課題があるんです。</p> <p>例えば小学校に入るときに、小学校に入る保育園の年長さんになって、福祉的な支援は受けています、ですが例えば実際の小学校と関わりを持つときに、急に教育の話になってくると、また一から教育のことをお話ししないといけないとか、教育のことが全然分からない、どういう選択をしたらいいんだろうとか、そういういろんな課題をお持ちなので、そういうところを支えていかれるのかなというふうに。特別支援学校経験教諭とか高い専門性を持ってらっしゃるということが書いてあったので、そのように私は読みました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>ありがとうございます。</p> <p>そうすると、これはむしろ市立幼稚園に限った話ではなくて、小学校に上がる就学前の段階の福祉というか特別支援と、小学校以上の特別支援を繋ぐ役割というか、そういうイメージなんでしょうね。</p>
出川聖尚子 委員	<p>この中ではそのように読めました。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>であれば、この発達支援コーディネーターという市立幼稚園のコーディネーターと、幼児教育全体と小学校の特別支援の繋ぎをする人というのは、確かに少し役割は違うのかもしれないですね。</p> <p>そういうことでいいでしょうか。</p>
若杉敏郎 特別支援教育室長	<p>今、出川委員のほうで言われた、福祉サイドと繋がっていて、年長とか小学校につながる直前に教育の話に変わっていくということは本当に我々も、非常にニーズが高いところだと思いますか、そういうご不安があるところだというふうに受け止めながら特別支援教育を行っていますが、その1つのかたちとしまして、先ほどの幼児教育センターに関わるところの一部とは思ひ</p>

ますが、熊本市の中にはご存知のとおりあゆみの教室とことばの教室があります。このことは、もちろん1つの学習のかたちとして、そういう子どもさんたちの発達や言葉、あゆみに関することを相談と言っておりますけど、市立幼稚園以外のところの幼稚園、保育園からももちろんたくさん来られていますし、そこを相談して、我々はそこの子どもの見立て、そして適切な指導をしっかりと周囲とも絡めながらやっているところですが、そのニーズはやっぱり高いというところがありまして。この資料でも9ページのところにあゆみの教室の人数とことばの教室の年度の希望者の推移がありまして、非常にたくさんのご希望と、できるだけたくさん受け入れていこうと今運営させていただいているところです。

お話を聞いていて、先ほどの教育・福祉コーディネーターですか、教育と福祉を繋ぐコーディネーターの部分の教育側を受ける側としては、実質的にあゆみとことばの教室の先生方や、そこに関わる幼稚園の先生方が熊本市全体のそういう機能もされている部分もあるのではないかなと思って聞いておりました。

遠藤洋路 教育長

このプログラムは熊本市立幼稚園まなび創造プログラムと言いながら、市立幼稚園だけじゃなくて市内の幼児教育・保育、就学前、全体にかかってくるのであって、また小学校にも関わる部分もあって、そこが確かに、どこの話をしているのかが分かりにくい部分はもしかしたらあるかもしれないので。もちろん全部に関わるから敢えて特定しない、そういう記述もあると思うんですが、もう一度読み直してみて、これは熊本市立幼稚園の話なのか、それともそれ以外の部分で幼児教育全体の話なのかというのがもし分かりにくいところがあるようでしたら、それを少し意識してもう一回読んでみるという話なんでしょう。

ご指摘のように、これはどこの、市立幼稚園にこういう人を置くのか、あるいは教育委員会に置くのか小学校に置くのか、その人は市立幼稚園を担当するのか、それ以外の施設も含めた市内全体を担当するのかという、1個1個見ていって説明をすれば分かるのかもしれませんが、一見分かりにくいところがあるかもしれません。そこは少し1回精査したいと思います。

他にいかがですか。よろしいですか。

小屋松徹彦 委員

まだちょっとこの内容の理解ができていないところなので発言のしようがないところなのですが、基本的に、最初のほうに出ていた、要するに幼小連携というときに幼稚園が学校に合わせるような、そういった現状があるということを知ったときに、ちょっとやっぱり違うんじゃないかと直感的に思ったんですけど。

大事な幼児期に本当に育むべき情緒というのがそれなりにあると思うので、そこはやっぱり大事に対処していかないと、あまり幼児にとって質の高い教育が何なのかというのは、いまいち分かってはございませんが、大事にすべきは幼児期の大事なその時期の子どもたちの心情とか情緒とか、そういったことにはしっかり配慮していかないといけないんじゃないかなというふうに思いました。

それと、感想になってしまいますが、だんだん少子化で市立に限らず熊本市内の幼稚園、保育園等も数が減っていかざるを得ないというときに、言っちゃ悪いですが、生き残りをかけてそれぞれの努力をしていくことになったときに、それが何かちょっと違う方向に行ってしまうんじゃないかなという危惧をしているんです。

というのが、保護者の要望の中には、小学校に上がってから遅れないようにとか学力的についていけるとかいうことで、早期に塾に通わせたりとか早めにいろんな勉強をさせたりとか、そういったことも一部出てきているわけで、そういったことがどんどん幼児期に広がっていくのが本当にいいことなのかというところもちょっと私としては心配しているところでもあります。

もう1つは、雑談的なことだと、園側の対応として、よくマーチングというのをつくって体育祭のときに子どもたちが立派な演奏を見せてくれたりしてくれますが、あれを見て親が喜んで、うちの子はすごい、子どもたちすごいというその感動もあります。一方、ある園では、ああいう型にはめたことを子どもたちに教えたくない、だから運動会ときにはとにかく子どもたちが元気な姿を見せる、親の前を走ってみせる、それで十分なんだというふうな態度を示されている保育園もあつたりして、ああ、園も様々なんだなと思いつつ、どっちがいいというわけではありませんが、何か幼児教育で大事にすべきものって何だろうなと思ったことがありました。

感想になってしまいましたが、以上です。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございます。

先ほどの苫野委員のご意見とも重なる部分があるというふうに思います。

幼稚園は義務教育じゃない、来てもらわないといけないということが前提としてあって、そんな中で保護者の求めるものが、ある程度、小学校に入って困らないようにしてくれというニーズがこれは確かにあることは事実だし、先ほどの椅子に座る練習じゃないですけど、小学校に入って椅子にも座れないと困るよねというふうに思ってしまうのは、当然それは自然な感情だとは思うので、そこをいかに早期教育というか、そういうものじゃないんだよということをご理解いただくかということ。今、小屋松委員がおっしゃったような、それから苫野委員がおっしゃったような感覚を多くの保護者の方がお持ちならばそれで現状を変える必要もないんでしょうけど、現状ではそうでないのだとすると、どういう方向で私たちはそれを理解深めて広めていくかという、大きな課題なんでしょうね。

あの幼稚園行ったら遊んでいるだけで何もしてくれないじゃないかということでも誰も来てくれないと、それはそれでやっぱり困る。そうじゃないんですよということをどう説明するか、支援するかということですね。それは大きな課題としてあるだろうというふうに思います。

幼児教育の関係者からしたらそれは当たり前のことなんだと思う一方、世の中からしたらそれは当たり前じゃない、そのやっぱりギャップがあるんでしょうね。親としては、小学校に入る前に日本語どころか多少英語ぐらいできるように教えてくれというニーズがやっぱり現実としてはあるので、それに応えたいと思う幼児教育機関があるのも、ニーズがある以上、ある程度しようがないんでしょうが。そんな中で市立幼稚園が率先して本来の幼児教育のあり方を示していくということは大事な役割としてあるんだと思います。

ゆとり教育のときもそうですけど、結局それで学力が大丈夫かという、やっぱりそれは本能的な不安はあるんですよ。それを、よっぽど大丈夫ですよということを示してあげないとうまくいかないんだろうと思うので、大丈夫なんですよと聞かれたときに、苫野先生、ちゃんと大丈夫ですよと言えるような内容があるといいですね。

苫野一徳 委員

エビデンスに関してはたくさん研究があるのでお示しすることはできるんじゃないかと思います。

遠藤洋路 教育長

ぜひその辺、またお力をお借りできればと思います。よろしくお願いします。

他にいかがですか。よろしいですか。

では、他にご意見がなければ、本件は以上といたします。

ちなみに、先ほどの幼稚園のプログラムは、最初に説明もありましたけど、まだあと2回ほどこちらで報告をする機会ありますので、ぜひそのときにも議論できればと思います。

日程第5 報告

・報告（1）小中一貫教育の成果と課題について

《石加浩二 指導課長 報告》

遠藤洋路 教育長

ここに今、示していただいたように、実際、小中一貫の方が中1ギャップというか、小学校と中学校の違いに戸惑いを感じた割合が少ないとか、学習面で先生が小学校は中学校、中学校は小学校の学習内容の話をする人が多いとか、こういう数字が出たということは大変良いことかなと思うんですが、一方で、例えばそれが不登校の減少に繋がっているとか、小中一貫校の趣旨みたいなもの、例えば中学校で不登校数が少ないとか、何かそういうアンケート以外の成果と課題、そういうものは何か現状持っていますでしょうか。

石加浩二 指導課長

私も不登校生徒がどうだろうと、一応確認をしてみようと思いましたがんですけど、一貫教育グループの学校では元々、不登校生徒がいなかったりとかいうこともあったりしまして。小さい学校が多いとかいうのもありまして、共通した顕著な結果というのは見られませんでした。

ただ、ある中学校では、一貫教育実施前の4年間で、中学校1、2年の不登校生徒の平均が6人ぐらいだったのが、一貫教育を行った2年間で2人ぐらいに減ったとかいうような結果も出ておりますが、ただ、その学校も今年はまだちょっと増えているということで、なかなか数字としてこうだというのはまだ見られていないかなと。1年間のモデル校ということもありま

	<p>すので今からかなと思います。</p> <p>学力も経年変化で追ってみたんですけど、なかなか顕著な、これは違うなというところまではまだ見られていない状況でございます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>分かりました。</p> <p>劇的というよりは、少し長期的な推移を見ないと分からないということですね。</p>
西山忠男 委員	<p>アンケートの結果は当然期待される結果であると思って全く驚かなかったんですけど、1つ驚いたのは、教員の声の中に、Aグループなのに、小中学校で日頃から連絡を取り合い、お互いを理解できるような時間、機会が不足していると思うという教員の声があったことです。</p> <p>これ一貫校ですよ。</p>
石加浩二 指導課長	<p>はい。</p>
西山忠男 委員	<p>一貫校でさえこういう状況なんですか。それがちょっと意外だったんですけど。</p>
石加浩二 指導課長	<p>今年とかは特にコロナの影響もあってなかなか、小中連携よりもそちらの方に時間を取られたとかいうのもありますし、定期的になかなか取ろうとしても取れない、学校内でも集まるといのができない状態です。ある学校では小中間をZoomで会議をしたりというような状況があったみたいです。なかなか機会といのが取れないので、今から先はそういったもので少しの間でも取れるような状況ができないかなと。幼小中連携も中止にした学校がかなり出てきておりますので、そういったかたちで時間や機会がちょっと不足しているというのが今年度の結果では出てきているのかなと思います。</p>
西山忠男 委員	<p>昨年視察しました二岡中と託麻東小の例では非常に良く連携が図られているようにお見受けしたので、こういうケースもあるのかなと思ってちょっと意外だったと思うんですよ。だから、やはり一貫校ならもうちょっとこういう声が出ない程度には連携してもらわないと困りますよね。という感想を持ちました。</p>

泉薫子 委員

一貫校なので非常に効果が出ているというので載っていましたが、中でも、教員の声の中から、私もなんですけど9年間のカリキュラム作成で学習内容がずっと長い目で見られるということに非常に意識が変わってきたというふうに書いていらっしゃる先生がおられて、学習だけではなくて精神的な成長というのも、学校の先生方はどうしても、小学校高学年から不適応を起こしている子どもが多くて、小学校の間に何とか解決しようというふうにされることが多いんです。自分の担任の間とか、小学校の間にとかという短いスパンで解決しようというふうに考えられることが多いような気がします。それを少し長い目で見ることができるというのは、非常にこれは大きなメリットだな、学習だけじゃなくて子どもの成長が実際中学校になって変わってきている、自分がやったことが非常に効果として出てくるというのを目で見ることができるというような、そういう意味での意識の変化というのを、先生たちは意識していただくということも、ぜひしていただきたいなというふうに思いました。

遠藤洋路 教育長

他にはよろしいですか。

小屋松徹彦 委員

私も、後ろの方のグループごとの棒線グラフの中で、機会の確保というのを見たときに、Aグループ、Bグループモデル、Cグループ、大きく3つに分けて書いてありましたけど、機会の確保は、AグループはBグループよりも課題として挙げている方が多いというのが何でかな、逆にA、B、Cになるごとに増えていくのを予想していたんですけど、そうじゃなくなっているから、何かこの機会の確保の捉え方が若干違うのかなというふうにもちょっと思ったんですね。

それと、学校代表の各グループの結果を見たときに、小中一貫教育のところなんで39ページですね、小中一貫教育と小中連携教育を活用できたかというところで、Aでは60%ぐらいある、Bは100%、これも何かさっきの絡みから見てAよりもBの方が何か活用できている、機会の確保もできているというのは何でだろうとちょっと思ったんです。そこはどういうふうに思われるんでしょうか。

石加浩二 指導課長

いろんなところを見ますと、AグループとBグループでこちらが予想している面と逆転しているというところもあるんですけど、先ほどの例えば活用できましたかとかいうところなんですけど、Bグループのモデル校、モデル校はやっぱり1年間それをやろうという意識が非常に高く、先生方も非常にそれに対して頑張ってもらってる。一貫校は数年前に1回モデル校をやって、それである程度形ができていますから、今現在、それに集中して、特化してやろうというようなことではないのかなと。そこら辺がこの結果として、十分、自分たちはもっともっとできるのにちょっとできていないとかいうような意味合いになっているのかなという気がします。機会も、モデル校のときにはもっといっぱいやっていたのにちょっと最近していないよねとかいうような意味合いが出てきているのかもしれない。

遠藤洋路 教育長

確かに概要じゃなくて本体の調査結果の方を見ると、Aグループは実は他とそれほど変わらない結果で、Bだけが何か突出しているような結果が多いですね。だから確かに小中一貫やり始めたから意識している、非常に強く意識しているということでそういう答えがアンケートで出てきているのかもしれないし、Aグループはある意味それが普通に、日常になっているのであまりそこを特段それやっていますと言わないのかもしれないですね。この結果を見ると。

でも、そうだとすると、アンケート結果がちゃんと実態を反映してできているのかというところが不安になるところで。できればそこが、実際の進捗状況とか実際の成果がうまく現れるような調査の方法があるといいかなと。アンケートも含めてですけど。確かにBだけちょっと違い過ぎるような気がする。小屋松委員がおっしゃるのは、確かにこの結果を見る限りはそうですねという。そういう弱点はあるかなと思います。

小屋松徹彦 委員

先ほどコロナ禍にあるからなかなか連携とか取りにくいという話でしたが、Aの場合は小中一貫、Bの場合は2と1とか、Cだけ2と2とか3と1とか2つになっていくわけで、どんどん連携が取りにくくなっていくパターンが多いと思うので、こういうコロナ禍だからこそとか、逆にリモートでやるということをどんどん徹底していくことのほうがむしろ連携を進めるうえではいいんじゃないかなと思うので、そこはコロナのせ

遠藤洋路 教育長

いにしない方がいいかなと思いました。

分かりました。

苫野一徳 委員

ざっと質問項目を拝見して、いまいち目的がよく分からない
というか、目的で、児童生徒、保護者及び教職員の意識等の状
況を把握し、今後の参考に資するという事なんですけど、何
を知りたくて、どうなれば良くて、どうなれば良くなくてとい
うあたりのこと、何かちょっといまいちよく分からないんです。

例えば同学年の友達が多くいるか。小中連携とかだとむしろ
校種を超えた交流がどれぐらいなされているかとかを聞いたほ
うがいいような気もしますし、学校に行くのが楽しいというの
はあんまり有意な差が出ていないと思うんですけど、これが分
かったからどうしたらいいのかが、何か分からなかったり、聞
き方も、もうちょっと何か工夫の仕方あるんじゃないかなとい
う気がするんですよね。

つまり小中一貫で、あるいは連携でどうありたいのかという、
こういうアンケートというのは、とにかく全体へのメッセージ
ですよね。つまりここを意識してほしい、メッセージのあるも
のだと思うので、小中一貫や連携でこういう効果を私たちは目
指したいんだよね、そのためにこれを知りたいんだよねという
設計が必要だと思うんですけど、何かちょっとその辺の構造が
よくつかみ取りにくいなと思ったので。何が本当に知りたいの
かというのはぜひ教えていただきたいのと、項目の改善を多分
できるんじゃないかなという気がするんですけど、いかがでしょ
うか。

石加浩二 指導課長

おっしゃるとおりだと思います。メッセージになりますので、
例えば先ほど言われました楽しいのかというようなところは、
先ほどの中1ギャップのところでも戸惑いを感じたかというのと
対比させてみようかなという意味があったんですけど、あまり
有意差がなかったのをごちゃごちゃにしました。

あと、優しくしようと思うとか、下級生に対してですね、
それは小中一貫教育で異学年をしているからこそ優しくなれる
んじゃないかなとか、そういった意味合いがあります。

実は昨年度は、AグループとBグループというのは、Aグル
ープだけだったんですけど、小中一貫校にだけアンケートを取
ってましたので、一貫校にアンケートを取るだけじゃなくて、

遠藤洋路 教育長

他のところも取って対比してどうなのかというのをやっぱり調べるべきだろうということで、今年初めてほかのところにそういうふうにさせていただいたというのがあります。

おっしゃるとおり、今から先、また中身を考えながらやっていきたいと思います。ありがとうございました。

確かに、小学校と中学校の比較というか、学校に行くのは楽しいかというの、例えば一貫校だったら中学校に行っても楽しいという人が減らないけど、一貫校じゃなかったら中学校に入ってからだんだん減ってくるとか、そういう顕著な違いがあれば、なるほどということなのでしょう。これを見る限りそういう結果にはなっていませんね。

むしろ学年ごとの違いの方が、中2と中3の違いが一番大きいような気がしますね。なぜか中3になるとみんな学校に行くのが楽しくなるという。いいことだと思いますけど、学年の色が大分何か違いますね。結果で上がったというのはそうなのでしょう。また改善していきましょう。

他にございますか。よろしいですか。

他にないようであれば、本件は以上といたします。

・報告（2）令和3年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果について

《石加浩二 指導課長 報告》

西山忠男 委員

今のご説明にありました長座体前屈のみが全国平均よりも低いと。これは小5で見ても中2で見てもそうですし、男子で見ても女子で見てもそうですよね。とても不思議なことに思われるんですけど、どうしてこんなことが起こるんですかね。学年によって高い、低い、それはあって普通なんですけど、どの学年でも、男子でも女子でもこれが低いというのはとても奇妙に思われるんですけど、何か原因は考えられますか。

石加浩二 指導課長

すみません、分かりません。

ただ、今回ちょっと伸びていたりしているのは、コロナ禍ではあったんですけど、くまもっとまなびたいムで大村詠一さんに出演していただいて、ストレッチとかリズム体操とかいうの

	<p>をテレビで放映したりして、それを子どもたちが前で真似したりとか、授業でもそれを見せたりとかいうのもあって、そういうのも影響をして少しずつ向上しているのかなというふうには思います。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これだけ毎年伸びているのに全国よりこんなに低いという。特徴あり過ぎますよね。長座体前屈。何か測り方が問題なんじゃないんですかね。そんな気もしますけど。長座体前屈の測定の仕方研修をしたら、一気に伸びるんじゃないですか。</p>
石加浩二 指導課長	<p>考えてみます。</p>
遠藤洋路 教育長	<p>これだけ違うのは何か原因が。実際、体力というか運動能力に違いがあるというよりは、何か別の原因があると考えてもいいのかもしれないね。 他にはいかがですか。</p>
苫野一徳 委員	<p>私の次女もいただいていた映像で踊ったりして、それを毎日見ているのはとても爽やかというか楽しくて、楽しそうに踊っているなと思って、ありがたいなと思っていたんですけど。 まさにそこが大事だなと思っていて、こちらの今後の対策のところ、4ページの③、中学校において「保健体育の授業において走る運動の習慣化を図るとともに、運動することや持久力の必要性を考えさせ、問題意識を高めていく」というところ。 学校教育を通してスポーツ嫌いになる子どもたちがごまんといるわけですよね。それを強化するような対策だけはしないような方策を考えたいなと思うんですけど。 この前、ある自治体の体育を見て、子どもたちが自分たちで問題を設定して、一緒に協働して、どんなふうに動けばいいかみんなで考えながらプロジェクトベースで、体育を自分たちでつくっていくというのを見たんですけど、あれはすごく楽しそうにやっていましたね。あれをやれ、これをやれとやられて嫌々運動して運動嫌いになっていく、競技が得意な人だけがどんどん良くなって行って、競技嫌いの子どもたちがどんどん体育嫌いになっていく。本当に腐りますよね。 なので、そういう子どもたちが運動を好きになるってどういうことだろうという観点で、こういうのは取り組んでいただくとありがたいなというふうに思っています。</p>

石加浩二 指導課長

ありがとうございます。

带状で入れることによって運動量を確保するという大事なところもございます。おっしゃるとおり、授業とか授業以外でもそうなんですけど、運動の楽しさや喜びを味わわせるという展開が一番大事かなと思っております。学校訪問を通してセンターとかが行っていただくんですけど、生徒が自ら考えるとか話し合うとか主体的に取り組めるような授業、教師も児童生徒に対して褒めたり認めたりする声かけ、分かる授業あたりを実践していくように研修会とかでもしっかりお話をさせていただきたいというふうに思っております。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。他にはいかがでしょうか。特にありませんか。

他にご発言がなければ、本件は以上といたします。

・報告（3）適応指導教室及び各教室の名称変更について

《川上敬士 総合支援課長 報告》

苫野一徳 委員

質問といいますか、感謝申し上げます。ありがとうございます。これは本当に素晴らしいことだと思います。多くの自治体が進めてほしいなというふうに個人的には思っております。

ありがとうございました。

遠藤洋路 教育長

よろしいですか。

では、他にないようでしたら、本件は以上といたします。

日程第2 事務局報告の件

（1）事業・行事等報告について 補足

若杉敏郎 特別支援教育
室長

事務局報告の中で、あおば支援学校と平成さくら支援学校の卒業生と進路先についてのご質問があった中で、十分でなかったので補足させていただきます。

卒業生ですが、あおば支援学校の卒業生、小学校6年は2名

<p>〔閉会〕 遠藤洋路 教育長</p>	<p>でございました。2名が中学校に進学いたします。 平成さくら支援学校、高校3年生でございますけど、25名 でございます。25名全員が就職の内定をいただいているとい うことで確認が取れましたので、ご報告いたします。</p> <p>本日の日程は全て終了したので、令和4年2月の定例教育委員 会会議を閉会いたします。お疲れさまでした。</p>
--------------------------	--